

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

『されど相澤與一』 ついに発刊！！

——庶民派ですので、

少々ラディカルと見られることもあるようです

相澤與一著

定価 2,000円＋税（送料サービス）

はじめに（無名の庶民として、幼少期のころの話、戦前の農村貧窮とファシズムの台頭、農家窮乏の歴史的意味、貧しくも懐かしい我が家）
いわきへの移住／夜間定時制高校／東北大学学生生活／福島大学／訪英海外研修と震災／息子の病
むすびにかえて（こころざしと援助、福島に生きて、妻・幸子への感謝）

【申込み・問い合わせ】 福祉のひろば E-mail : mail@sosyaken.jp

TEL : 06-6779-4894 FAX : 06-6779-4895

★ホームページ(<http://www.sosyaken.jp/hiroba/>)からも購入可。

だから社会福祉はもしろい！

私の社会福祉研究



今号の特集は、若手の社会福祉研究者による座談会です。参加者メンバーから、“私の研究をあらわす写真”をいただきました。

若者支援の研究をしている岡部茜さん（大谷大学講師）。上の写真が今年の6月にスコットランドでポスター報告をしているようです。下の写真は、福島県での若者支援者交流会でのようです。



伊牟田靖宜さん（社会福祉法人麦の芽福祉会）。はじめてフェリーに乗ってみよう！ と、なかまと鹿児島湾を渡って「かのやばら園」へ（写真上）。「失くしてもいいよ。失くしたら一緒に困ろう」と、チケットも自分で買って、自分で持ちました。なかまは「チケットをなくさないかドキドキした」と言いながら、はじめてのフェリーを楽しみました（写真下）。

「確な『生活保障法』の制定を！
改正要綱案（改訂版）』を題材に～」

19年5月15日

日本弁護士連合会



桜井啓太さん（立命館大学准教授 写真上）は、元ケースワーカーで、生活保護、自立支援、貧困などをテーマに研究されています。写真は、「ケースワーカーの人員と専門性の確保」について講演をしているところです。

午頭潤子さん（白梅学園大学講師 写真下・前列一番左）は、介護現場の実践者から教員になりました。介護総合演習の学外授業で、国際福祉機器展に行った写真です。「学生たちは福祉の未来のなかま」と話されます。



保田真希さん（北翔大学短期大学部講師 写真上・前列左から2番目）は、教員になって2年目です。はじめて常勤として働き、はじめて担任をもち、はじめて施設実習（保育実習）の責任者をつとめ……いろんな「はじめて」のことを経験したときのクラスの学生さんたちとの写真をくれました。

中野航綺さん（東京大学社会学研究室博士課程1年 写真下）は、現在、河合克義総合社会福祉研究所理事の調査研究に参加しています。（文 申 佳弥、写真 みなさんからの提供）

●特集Ⅰ● わたしたちが明日を守り、つくる

【座談会】若手 社会福祉研究者による座談会——西日本編——

人権とはなにか、尊厳とはなにか、いまあるものを問いなおす

桜井啓太／岡部茜／伊牟田靖宜 10

●PHOTO● それぞれの夏！

こばと会 3園の年長児クラス合同キャンプ！ 28

ひびき福祉会 リーブキャンパスひびきのキャンプ 30

大阪福祉事業財団 城東老人ホームの夏祭り 32

●特集Ⅱ● わたしたちが明日を守り、つくる

【座談会】若手 社会福祉研究者による座談会——東日本編——

研究と実践の両輪で社会のあり方を問いなおす

午頭潤子／保田真希／中野航綺 34

●トピックスⅡ●

いちばん若い原爆被爆者の証言と、平和への願い 塩見一弥 50

全職員の基本給の積み上げこそが必要 54

2019年度会員のつどい 56

木の香り漂うステキな空間が誕生しました 59

●連載●

阿修羅がゆく

わたしが好きな釜ヶ崎（3） 水野阿修羅 62

相談室の窓から

子どものころから見守ってきたK子さんとS男さん（2） 青木 道忠 64

育つ風景 ごめんねって言って 清水 玲子 66

ひととしてあたりまえに生きたい

ろうあ者のためのセンターが動きはじめる 清田 廣 68

映画案内

『焼肉ドラゴン』 吉村 英夫 70

現代の貧困を訪ねて

原発事故被災者の貧困——動物と震災 生田 武志 72

似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート

お子さまはお子さまらしく！ その2 ラッキー植松 74

ホームレスから日本をみれば ありむら潜 76

花咲け！ 男やもめ 川口モトコ 77

●表紙の絵●
神門やす子



みんなのポスト 60／福祉の動き 78／今月の本棚 81

●グラビア● だから社会福祉はおもしろい！

——私の社会福祉研究——

——『福祉のひろば』発刊40周年企画 その1——

福祉労働運動と 研究所への思い

全国福祉保育労働組合大阪地方本部
大阪福祉事業財団分会

今井 修さん

私が小学校五年生のとき、父親が脳卒中で倒れ、生活が苦しくなりました。母親がいろいろと働き、生活を支えていました。高校生のときに社会科学の本を読み、貧困は個人の責任ではなく、資本主義社会が生み出すものなんだと学んだとき、うれしかった！ それまでの私は、貧困を両親の責任にしていたからです。

大学は、さいわいにも二年の自宅浪人を経て、授業料の日本一安い（当時で月八〇〇円）大阪府立社会事業短期大学に入学できました。お金がないので、教科書も買えずに大学図書館の本を借りてすませたことを思い出します。社会科学の本も大学図書館で借りて読みました。

授業料が安いという理由で大学を選んだので、当初から社会福祉・社会事業については関心があったわけではありません。しかし、孝橋正一の著書『社会事業の基本問題』では、資本主義社会と社会事業の関係分析をしており、そこから社会福祉・社会事業に少し関心がもてました。さらに、神戸の「生活と健康を守る会」の援助で、奨学金月三〇〇〇円を借りられたことと、学友たちの連帯により、私の学生生活は安定したものになり、社会福祉にも少し関心が生まれました。

当時は、学生運動が花開いていました。私は自治会の書記長をしながら、「七〇年安保闘争」に身を投じていました。大学二年目の四月に黒田革新府政を実現させたよろこびは、いまま運動の確信になっています。チリで、社会主義の実現をめざすアジェンデ政権が選挙により実現したことから、その後の反政府軍事クーデターにより政権が倒され、テロによる弾圧への怒りは、



40周年企画として、総合社会福祉研究所設立初期の会員さんに、この間の活動や社会福祉への思いをリレーで語っていただきます。

いまい おさむ

1972年、大阪府社会福祉協議会就職。1983年、全国福祉保育労働組合大阪地方本部副執行委員長。2000年、大阪府社会福祉協議会を退職し、福祉保育労大阪福祉事業財団分会専従。
現在、大阪地本特別執行委員、財団分会副執行委員長、非常勤専従。

いまでも鮮明に思い出します。

一九七二年四月一日に大阪府社会福祉協議会に就職し、その日に組合加入を働きかけられて、加入しました。就職してうれしかったのは、本が買えることと、健康保険に加入したことで医療費がかからない（当時は医療費の自己負担は五〇〇円）ことでした。当時は、ベトナム戦争反対運動と沖縄返還闘争（当時の沖縄は米軍の占領下）で、ストライキがひんぱんに行使されていました。一九七五年四月三〇日に、社会主義国の北ベトナム軍と解放戦線の戦車が南ベトナム大統領官邸に入り、南ベトナムをアメリカから解放し南北統一を実現しました。その翌日の五月一日メーデーは、大盛りあがりとなりました。労働運動に身を投じて、社会福祉・社会保障の役割を学び、学習と研究の必要性も感じていました。

組合の役員をしていたときに、福祉保育労大阪地本大阪福祉事業財団分会から、戦前からつく大原社会問題研究所のような研究所をつくろうと提案がありました。私は、大原社会問題研究所への不十分な理解のまま、設立された総合社会福祉研究所の会員になりました。そして、当時の石倉主任研究員（現理事長）と一緒に、会員を二〇名拡大しました。研究会も立ち上げ、加藤園子先生が立ち上げた福祉労働研究会に呼応して、福祉労働運動研究会を開催していました。仲間と福祉の仕事のおかげで、九七歳の母を虐待せずに見送ることができました。

貧困問題は、私の原点です。国・自治体が公的責任から撤退しているいま、労働組合と研究所が全国に警鐘を鳴らし、運動をすすめていくことがいま求められています。

特集

わたしたちが明日を守り、つくる 若手研究者たちの座談会

今年で、『福祉のひろば』が発刊して四〇周年をむかえます。その記念企画として、特集では若手の社会福祉研究者による座談会を、西日本と東日本の二か所で開催しました。

「研究」と聞くと、理論研究や調査研究をもとにしたとても高尚でとおいものを感じる方も多いのではないのでしょうか。しかし、社会福祉「研究」も、目的は社会保障・社会福祉を充実させ、人々の生活をよくすることであり、それは現場実践と切り離せません。いっぽうで、現場の実践にとつても、日々の実践からいっぽ距離をとり、実践をまとめ、みんなで共有し、議論し、次の実践につないでいく「研究」が欠かせません。社会福祉において、実践と研究は切り離せないものであり、相互に影響しあっています。それが、社会福祉分野の魅力であり特徴だと思います。

これからの社会福祉をになう若手の研究者で座談会をしよう企画をたてたとき、鹿児島県社会福祉法人麦の芽福祉会さんから、現場の実践者を「研究者」として送り出したい、とお話をいただきました。また、現場の実践者から研究者になられた方にも参加していただきました。研究と実践が切り離せないことがわかる、『福祉のひろば』らしい座談会になったと思います。

数年前、総合社会福祉研究所でも、若手の現場職員さんたちと真田理論を学習してみようと、「コレ部」（真田

是を「なおし」と読めず「これ」と読んだことからコレ部になりました」を立ち上げました。二年ほど定期的に開催し、本誌でも何度か報告しましたが、私の産休・育休などもあり、現在休止状態となっています。

福祉現場がどんなにしがしく、きびしくなるなか、いっぱひいて実践をふりかえる「研究」をつづけることは、かたんだではありません。しかし、「コレ部」に参加していたメンバーには、「いっぱひいて日々の実践を考えたり、他分野の方の意見を聞ける場は、勉強にもなるし息抜きにもなる」と話される方もいました。今回座談会に参加してくださった桜井啓太さん（立命館大学）は、現場実践だけではしんどくなると思い大学院に進学されたと話されます。

また、今回参加してくださった方全員が、いまの社会のあり方や社会保障・社会福祉の実態に不条理や疑問を感じた経験をきっかけに、研究の道に進まれています。国民の生活ではなく経済を優先させる国のあり方、自己責任を強め格差をひろげる社会構造や政策、一人ひとりの生活に向き合う余裕をもてない福祉現場の労働環境などに疑問を感じ、なんとかしたいとそれぞれの現場や研究で力を発揮しています。ここに、これからの日本の社会福祉の展望があると思います。

『福祉のひろば』創刊号（一九七九年）には「本誌の目標は、日常のとりくみを、ありのままに総括し、その現実から出発し、みんなの力で、この現実をどう発展させるか、をみんなで学習しあい、励ましあう場とすることです。誰でも自由に発言でき、自由に問題提起のできる『ひろば』です」とあります。

きびしい現実はいくらありますが、きびしいからこそ、みんなで共有し、学習しあい、現実を発展させる方向を一緒に考えていくことが欠かせないし、それが福祉実践のはげみにもなるのではないのでしょうか。

（編集主任）